

## フーコーを实践

ミシェル・フーコーが亡くなったのは一九八四年だから、既に四半世紀以上が経過している。だが彼の遺した思想のリアリティーは、むしろその後の世界の進み行きの中で刻々と増しているように見えるし、フーコーに関する書物もコンスタントに数多く出版されている。最近も、フー

コーの同僚だった歴史学者ポール・ヴェーヌによるメモワール的な評論『フーコー その人その思想』（慎改康之訳、筑摩書房・二九四〇円）や、昨年には、フーコーを「実践

的に使う」ことに特化した入門書であるギャビン・ケンダールほか『フーコーを使う』（山家歩ほか訳、論創社・三一五〇円）などが翻訳されている。

## 知の射程を測る

日本におけるフーコーの最良の紹介者・翻訳者の一人である中山元による二冊が、ほぼ同時に登場した。『フーコー 思想の考古学』（新曜社・三五七〇円）では一九五〇、六〇年代の初期、『フーコー 生権力と統治性』（河出書房新社・二九四〇円）では七〇年代の思想が、詳細に

フーコー  
生権力と統治性

： 中山元

河出書房新社

が出そろったことになる。フーコーの思想の射程は驚くほどに広いが、一言でいうなら「人間」の「知＝思考」の臨界点を、さまざまな領域／次元で計測・画定しようとするプログラムであった。

中山氏は原テクストを緻密に参照しつつ、精神医学、文学、哲学、思想史、政治学など多くの領域を横断し、何度かの変貌を経ながらも強固に一貫したプログラムを走らせ続けたこの希代の思想家の肖像を、精密かつ鮮やかに描き出している。

中山氏の著書の中でも分析されている最新期のフーコーの論文も邦訳が出た。『カントの人間学』（王寺賢太訳、新潮社・二五二〇円）は、カントが生前最後に発表した「人間学」への鋭利な注解であるとともに、フーコー哲学の第一歩でもある。

佐々木敦

（批評家）

『フーコーとパレシニア』（筑摩書房・五二五〇円）と併せて、中山氏のフーコー三部作